

連城三紀彦

誰かヒロイン

誰かヒロイン

連城三紀彦

誰かヒロイン

著者 連城三紀彦

発行者 井上功夫

発行所 株式会社双葉社

東京都新宿区東五軒町三―二八 一六二

電話 (〇三) 五二六一―四八一八 (営業)

(〇三) 五二六一―四八三三 (編集)

振替・〇〇一八〇―一七二九九

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

落丁乱丁の場合は本社にてお取りかえます。

定価・発行日はカバーに表示してあります。

©連城三紀彦 1995年 Printed in Japan

ISBN4-575-23240-8 C0093

¥1500-

1995.12.15 第1刷

誰かヒロイン

装帧／上原ゼンジ

1

「何を書いてるんだ？」

布団の中から、新兵がそう声をかけてきた。

目がさめたらしい。

「前の男への別れの言葉。あの葉書にね……桜を押し花にした葉書。昨日、嵯峨野をまわったときに土産物屋で私が買ったでしょ」

架世はペンをおいてふり向いた。新兵は布団から突きだした首をのけぞらせ、顔を逆立ちさせて、枕もとの文机にむかっている架世を見ている。喉仏がぴくんと跳ねた。

「なんだ、まだ続いていたのか。あのアルマーニか何かのスーツ着てたエリート風だろ。あれで完全に決着がついて、それで俺に乗り換えたと思ったよ」

「気もただけね……まだ少し、生ゴミみたいに残ってるものあるから、字に書いて棄てちゃおうって」
「何て書いたんだ」

眠りにまだ半分うずまつた声でそう言うと、手だけを伸ばしてきて葉書を握もうとした。

その前に架世はかるた取りのようにさつと葉書を取りあげ後ろ手に隠した。

「いやっ。だって本当に生ゴミの言葉だもん」

「ひでえんだな」

新兵はふざけた手つきで、布団の端に届くように流れた架世の足の裏をくすぐった。架世は手帳の間に葉書をはさみ、仕返しに素足の指を若者の寝乱れた髪にすべりこませて掻きむしった。

「何時？」

「まだ七時半。御飯運んでくるまで寝ててよ……私はひとりで旅情やつてるから」

大きな欠伸でそれに答え、新兵はまた目を伏せた。春らしい花吹雪の舞った豪華な掛け布団とその、架世がよく『ジーンズにマジックで目と鼻と口を落書きしたみたい』とからかう洗いざらしに似た顔とが不調和だった。アンバランスというなら、だが、大学生をこの春でもう六年もやっている娘と、大学は卒業したけれど自分の歩きたい本当の道がまだ見つからないと言つて臨時に長距離トラックに乗つて国道を走っているまだ学生気分の若者とが、こんな京都の、それも超一流の和風旅館で一夜を過ごすこと自体が似合わないのだ。

一週間前、東京は桜が最後の盛りの日で、いつしよに夜桜を見に出かけた。その帰り道、新兵は架世の腕を掴むとついと裏道にそれた。煉瓦風のタイルに覆われたホテルには品のないオレンジ色のネオンが光っていた。「いやだわ、私、こんな安っぽいところは」そう答え、

「だったらどこならいいんだよ」

照れ隠しに不機嫌な声を出した新兵の腕を今度は架世が掴んで、表通りへもどり本屋に飛びこんだ。『日本の名旅館、名ホテル』という雑誌をとり適当なページを開いて新兵の目につきつけた。ほとんど

冗談のつもりだったのに、四日後電話がかかってきて、

「三晩も深夜便やって金作ったよ。次の火曜なら部屋空いてるらしいけどバイト休める？」

新兵は初めて聞くようなマジの声を出した。

「バイトは休めるけど学校が……」

「六年生が真面目に出席したら先生にも笑われるだろう」

いつもの笑い声にもどった時、架世は決心がついた。気持ちよりも体が先に、聞き慣れた少し不良っぽい投げやりな笑い声に反応した。若者がその名旅館をラヴホテルがわりにすることはわかったのだ。

それでも架世はモデルのバイトで手に入れたシャネルスーツを着てきたが、新兵は破れ穴のあるジーンズにやれたジャンパーを羽織って、トラック便に乗るままの恰好だった。

品のいい笑顔で愛想よく迎えられたものの、新兵が脱ぎ捨てたハネ泥だらけスニーカーに仲居が蔑むような一瞥を投げたのを見た。

不調和は架世と新兵の間にもあるのだろう。架世は自分が大学生としては落ちこぼれではあっても女としてはエリートだと思っている。いや、その自信があるからモデルのバイトの方を優先して『大学に通わない大学生』をやっているのかもしれない。整ったという意味での美人ではないが、目も口も大きな個性的な顔で、体もモデル向きにすらりとしていて男の目を惹く自信はある。モデルと言ってもせいぜいデパートのショーやスーパールのバーゲン品広告の仕事だが、並とは違う派手めのバイトで

はあつて、お高くとまっているという噂もあつたし、自分でも男を見る目は厳しく傲慢だと思つてゐる。高校時代からの親友で平凡なOL勤めの鮎美に新兵を紹介した時、「男をアクセサリーだと言つてゐる架世が今度は何？ 夜店の指輪も結構おもしろいつて、そんなところ？」冗談半分にそう囁いてきた。

野川新兵。架世と同年の二十三歳だが、ジーパンの後ろポケットそっくりの五角形の顔は素朴さと幼さを残してゐて、架世より二つ三つ年下に見える。

三カ月前までつきあつてゐた藤野英一が、大手貿易会社に勤める二十五歳のエリートで着るものだけでなく顔の肌までがブランドだつたせいとか、新兵に最初に逢つた時はデニムの生地そっくりに素朴にざらつた顔だなと思つた。事実その時も、ズボンはいくつなんだという感じではゐてゐたジーパンが似合つてゐた。他でもない、三カ月前の真冬の晩、渋谷のスナックで架世が藤野と別れ話をしている真つ最中のテーブルに若者は体をぶつけてきたのである。ビール瓶が倒れ『ごめん』そう叫んでひよいと架世を見て、

「あれ、久しぶりい。高校出てからだから何年になる？ 俺だよ、新兵。野川新兵」

そう言い、架世がとまどつてゐるうちに「そっち終わつたらこっちへ来いよ。久しぶりだから話そうよ」そう言い、さつさとカウンター席に戻つて酒を飲み始めた。今の言葉も忘れたようにそつけない背をむけたまま。二分後には架世は「じゃあ、もう電話かけてこないで」そう言つて立ちあがつてゐた。エリートビジネスマンを置きざりにしてカウンター席に向かい、着古して編み目があちこち崩

れかけたセーターと肩を並べて座った。

「高校って麻布の？」と訊いた。

「ああ」

「嘘ばかり。私、麻布じゃないわ」

「何だ、もうばれたのか」

「最初からばれたわよ。下手な芝居だもの」

「——大声で別れ話してりゃ、他の客に迷惑だろ。早いこと終わらせてやったんだよ。しつこい男に困ってるみたいだったし」

藤野が立ちあがり店を出ていく気配を背で読みとったが、架世はふり返らなかった。

「じゃあ、聞こえたの。喧嘩の原因も？」

「ああ、男がベッドにあがる時にアダルトビデオ流そうとしたからだろ……そんな人とききあいたくないって。それだとあんた、男とききあえないよ。男はおんなじ体してるからさ、エリート風も俺みたいな落ちこぼれも」

「……それくらいはわかってるわよ。ビデオのことはただのきっかけ。他にも女がいるの。——私、そのビデオの女優の顔がその女と似てるんだらうって気がしたの。最低。落ちこぼれて何から落ちこぼれたの」

「体の隅っこに自分でも気づいてない小さな穴が空いてて、その穴から……たぶんね。それより名前

は？ 俺はもう名乗ったろう」

そんな風に始まった。後で大学時代にその店でバイトをしていて安く飲めるのだとわかったが、貧しそうな若者は芸能人も来るといふその店には場違いに見えた。架世だって藤野のおごりだったから入れた店である。

場違いは服装だけでなく気持ちにもあつて、新兵は美人モデルと自分との釣り合いがとれず、不良っぽく好き勝手を言いながらも内心のどこかでは、自分がただの夜店の指輪だという引け目はおぼえていたようである。

すぐに体の関係に入らなかつたのも、架世の冗談を真に受けて二人の最初の夜のためにこんな高級旅館を用意したのもそのためだったのだろう。ただ昨日の晩、とうとう体を手に入れると他の男と同じように、架世が高嶺の花からただの「女」になつたと信じこんでいるらしい。今のまだ半分眠りにつかつていた声にもこれまでにはなかつた慣れ慣れしさが出ていた。

架世は、実年齢よりもさらに幼く見えるその寝顔を見ながら、まだ数時間前、絹のような高価な感触のシーツの中で、若者の体が洗いざらしのジーンズ生地に似ていたことを思いだした。すりきれながら素朴でタフで、砂色の肌にはこれまでつきあつてきたエリート青年たちとは違う、土のような懐かしい自然の匂いがした。そんなアメリカの片田舎の木造りの家が似合いそうな若者の体には、昨夜の行燈風のスタンドの灯も今障子ごしに部屋を照らしている和風な朝の光も似合わなかつた。

その光が障子に風の影を流している。

そう見えた。本当はこの宿の裏庭をおおいつくした竹林の笹が、風にゆれて影を流しているだけだが、朝の陽ざしはまだおぼろげで笹が波だつたびに波紋のような淡い影を障子の和紙ににじませ、それが風の影のように架世の目に映るのだった。

薄墨色の影には緑がしみついていようにも見える。昨日宿についてすぐ障子を開いて裏庭を見た時の衝撃が残っているのだろう、笹があちこちに雪崩を起こすように生い茂った庭は緑の嵐だった。それはそのまま、今まだ布団の中で眠っている若者と抱き合つた夜の余韻でもある。春だというのに京都の市街をはずれた山里のこのあたりは風が激しくて、闇には絶え間なく笹の葉のざわめきが起こり、その音もまだかすかに体の芯に残響している。

架世は自分が書いた葉書を読んでみた。

『一人でさびしくて夢の女抱くときは、アダルトなんか見るよりあの夜の私の体を思いだすべし』

不調和はここにもある。夜が明けきる前に目をさまし、いろいろと別れの言葉を考えてみたが、結局そんな、品のいい葉書とはそれこそアンバランスな冗談めかした言葉にしかならなかった。真面目な言葉を書けば何を書いても、書ききれない余白が残りそうな気がしたのだ。気もちの裏を覗けば終わったはずの男にまだ未練がある……押し花の花びらと同じに枯れて色あせながらも、薄く紅色に色づくものが気もちに残っている。それをふざけた言葉で蹴散らしたかった。

読みなおし、『あの夜の』という言葉×印で消し、それだけを別の言葉に変えて、

「これでいい」

声を小さく出して呟いた。この冗談めいた葉書の方が、一人の男との馬鹿げた関係の終止符には似あっている……。

同じ時刻、東京新宿駅のホームのキヨスクの前で、宮原鮎美^{あゆみ}はスポーツ新聞に手を伸ばそうかどうか迷いながら突っ立っていた。電車の中で中年サラリーマンが読んでいたスポーツ新聞に鮎美の好きなロック歌手のスクランダルが報じられていた。

電撃結婚？

見えたのはその見出しだけだった。

新宿でいつもどおりに電車を降り、このまま変に気にして会社に行くより、思いきって新聞を買ってどこかで読んだ方がいい。だが、若い女がスポーツ紙を買うのに変に抵抗があつて、手を伸ばしきれずにいた。

ラッシュはもう始まっている。隅に突っ立った平凡なOLなど押しのけて男たちの手が次々に週刊誌や新聞を買っていく。

中年男がおもしろがる事件でも載っているのか、鮎美の目当ての新聞が特に売れ行きがよく、瞬間に最後の一部になってしまった。

鮎美は決心がついてそれを掴みとり、週刊誌の上に載せて「いくらですか」と訊いた。

「百十円」

そつけない返事に焦りながら、小銭入れをとりだし、次々に押し寄せてくる男たちにもみくちゃにされながら硬貨をさしだそうとしたが、それより一瞬早く、男の手が伸びて新聞の近くに百円玉と十円玉が投げられ、次の瞬間には男の手が新聞を掴みとっていた。

反射的に鮎美の手もそれを掴み、奪い返そうとした。

「私のです」

そう叫んでいた。咄嗟の反応で、新聞を買う恥ずかしさなど忘れてしまった。

「慌てなくてもいいよ」

新聞をとった男は手で『ちよつと待て』という合図をして、キヨスクの横へと回りこんだ。新聞を広げると、その一ページを大きく切りとり、残りを、

「どうぞっ」

歌うように声を軽く跳ねさせて、鮎美の手に渡してきた。

「どうせ、芸能記事だろ？俺はテニスの結果知りたいだけだから」

馬鹿にしたような声にグツと反感がわいた。

「私、高校のころからテニスやつてるから、そのページ読みたくて買ったんですけど」
返してくださいと百十円をさしだした。

「何だ、まだテニスやつてるの」

男の変に親しげな声が興奮した頭に不快に聞こえた。『その年齢で？』と馬鹿にしたように聞こえた

のだった。

「私がテニスやつてるの、変なんですか！」

だが、その言葉を最後まで口にできなかった。男は目を細くし笑っている。目尻の皺が柔らかかった。最近多い若者風中年……革のブルゾンなんか着て、南の島へちよつとダイビングにいつてきたんだなんて言いたそうな、太陽と遊んだ週末の思い出をイヤ味に皮膚の色に残して得意がつてるヤツ。でも私、この人知ってる……

すぐに思いだせなかった自分に鮎美は驚いていた。いくら並とは違う二枚目の顔でもこれだけ周りに顔が渦巻いていると埋没しちゃうんだ……。

「握力は相変わらずだな。それから攻撃されたら反撃に燃えあがる勝気なところも」
笑っている男に、鮎美は思わず、

「キャー」

と歓声をあげてしまった。高校のころ、テニスコートの客席であげていたのと同じ黄色い声で。

十分後、鮎美は男と別れいつもどおりに会社にむかった。いつもどおりに仕事をして、三時すぎに書類を他の会社へ届け終え、地下鉄の駅から鮎美は親友の良子に電話をいれた。

「なんだ、今度はアーミンか」

受話器は不満げな声をあげた。

「今度はって？——それよりアーミンっていうのはやめてって、言ってるでしょ。私は良子と違っ

て、堅気ですからね。仕事中？」

「いいえ、恋愛中。っていうか失恋中かな。彼、一昨日電話かけてくる約束なのに、まだかけてこない」

「二日もずっと待つてるの、電話の前で？」

最初のコールが終わる前に電話に出たのが変だと思っていた。

「あと一時間で、三日目に入る。ああ、そうだ、このちよつと前に架世が京都から電話かけてきて、八時頃に着く新幹線で帰るから、そのあと土産もってこつちへ来るって」

「京都って、仕事で」

「さあ、南禅寺で湯豆腐食べてるって言ってたから男と一緒にやないの」

「ちようどよかった。私もその頃そっちへいく。今朝すごい人に逢ったから架世にも良子にも報告したかったところ。誰なのかは後のお楽しみにしといて……まあ、その頃には良子も失恋かどうかはつきりするでしょ？」

いつの間にか高校の頃のアーミンの声にもどっている自分に、鮎美は気づかなかった。

桜が終わりゴールデンウィークにはまだ少し早い一日で、京都は人出も少なく春の陽ざしまでが半端で気だるかった。

架世と新兵は宿を出た後、銀閣寺から細い川沿いの土手の小道を歩いて南禅寺に出た。そこからバ

スで京都駅に出て、新幹線の自由席乗車券を買った。南禅寺参道の湯豆腐屋で、残り少なくなっていた全財産を使い果たした若者のために架世が二人分の切符を買った。

ホームを夕靄がものうげに包んでいる。

町なみには灯がまばらにともり、古都は夜にむけて化粧支度を始めていた。

架世が親友へのお土産を買っている時にひかり号は二つのライトで夕闇を裂き、ホームへと流れこんできた。

「早く」

列の一番最後から乗りこんだ若者が大きく手招きする方へと小走りに近づいた。だが、架世の足は白線の上で止まった。架世は首をふって「一人で帰って」と言った。

「私は次の列車に乗るから」

「どうして？」

きょんとした若者に、架世はバッグの中から今朝の葉書を取りだして、それを一方的に押しつけるように男のジーンズのポケットにねじこんだ。『あの夜の私の体』を『昨日の夜の私の体』に書きなおした葉書を。

「後で読んで。これ、あなた宛てに書いたのよ、今朝……アルマーニのエリート風にじゃなくて。あれは前の前の男……読んで。私の別れの言葉はそれだけ」

若者は何がかかわからず、下車するのも忘れてデッキに突っ立っている。体を手に入れ安心感に